

特集
古代都市
～日本人とまちづくりの原点～

Special Features
Ancient cities
The Japanese and the origins of town development

古代に見る日本の原風景
Archetypal scene from ancient Japan

奈良時代の家族と結婚

梅村 恵子

UMEMURA Keiko

川村学園女子大学/文学部史学科/教授



1—山上憶良の子育て

憶良らは今は能らむ子泣くらむ
そを負ふ母も吾を待つらむそ

『万葉集』巻3-337

(わたし憶良はもう退席させていただきます。家ではきつと幼いこどもが大泣きしていることでしょう。こどもを背負ってあやしている母親も、今か今かとわたしの帰りを待っているはずです。)

筑前国(現在の福岡県北西部)の国守(今の県知事)となった山上憶良は、大宰府での宴会にしばしば招かれた。本来なら国守は一国の長だから宴会から退席するのも勝手次第のはずだが、九州は特区扱いで、各国の上に大宰府が置かれ、大宰府の長官、大宰帥の命令には逆らえなかった。上司が同席する宴席からなかなか抜け出せないのは、今も昔も変わりはない。

憶良には、次のような「子等を思う歌」と題する長歌もある。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ
何処より 来りしものそ 眼交に
もとな懸りて安眠し寝さぬ

『万葉集』巻5-802

(宴会のデザートに出る瓜や栗を食べるときには、いつも可愛いわが子のことを思い出す。あの子に食べさせたら、顔をくしゃくしゃにして、かぶりつくことだろう。可愛いわが子のことが気にかかって、ゆっくりと寝ることもかなわない。)

奈良時代には、瓜や栗は貴重なお菓子であった。晩年になってようやく子どもをもった憶良は、普通の父親以上に子どもをいとおしむ気持ちが強かったのかもしれない。



■写真1—奈良時代の食事。上流貴族の宴会の食事(左) 下級役人の食事(右上) 庶民の食事(右下) 『飛鳥 藤原京展図録』より 2002年 (料理:奥村彪生)

2—奈良時代の結婚

ところで、奈良時代の結婚は妻問い婚だったといわれることが多い。夜ごと男が女のもとに訪れ、夫婦が一緒に暮らすことはない。子どもは妻の家で育てられ、父親は子育てにはかかわらない。母と子どもとの関係は深い。父親と子どもとの間には強い親子愛は生じない、というのである。

そのために、憶良の子どもをおもう歌についてはさまざまな解釈が加えられてきた。憶良の父性愛は当時の日本人男性のものとは違う。それは、憶良が若い時に遣唐使の一員として中国に渡り、中国の家族観を知っていた。そのため、中国的な、儒教的な父子・夫婦を理想として歌にしたのだろうか、憶良は朝鮮半島からきた渡来人であったから、日本的な家族とは違う家族のスタイルをもっていたのだとかいわれる。

しかし、本当に奈良時代の人々は、妻問い婚のかたちの結婚生活をおくり、夫と妻、父親と子どもは同居していなかったのだろうか。まずは、奈良時代の家族の暮らし方をいくつかご紹介しよう。



■写真2—貴族の家族 『飛鳥 藤原京展図録』より 2002年

3—大伴旅人の妻と子

憶良に酒を強いた大宰帥は、大伴旅人という。旅人は、大和朝廷の創立以来の有力な豪族、大伴氏のリーダーであった。旅人が大宰府に赴任するとき、彼の妻も同行している。しかし、旅人の妻は、九州滞在中に亡くなってしまふ。正三位中納言兼大宰帥という高官の妻の死に対して、都から弔問のために勅使が派遣され、香典の品が届けられた。九州に伴った妻が、正妻として朝廷に届出がされていたからである。

旅人には、54歳になってようやくさずかった男の子がひとりいた。『万葉集』の編纂者といわれる大伴家持である。旅人は九州にまだ11歳の家持も連れていった。ただし、大宰府に同行した正妻は家持の母親ではない。家持の本当の母親は若い女性であつたらしく、この時から50年以上生きていたことがわかっている。

4—藤原不比等のこどもたち

当時の有力な男性たちが、旅人のように何人かの妻をもつことは普通のことであった。妻たちのあいだに差別もなく、恋愛か結婚かの違いもあまいなカップルが多かった。しかし、中国的な社会体制への変革を進めていた政府は、妻たちのなかからひとりだけを「妻」として朝廷に届けることを義務付けることとした。旅人の「妻」と公式に認められるのは、大宰府にともなった女性だけ

となる。

五位以上の官人の「妻」は外命婦と呼ばれ、朝廷での儀式に出席することができた。また、「妻」の子どもは他の妻たちの子どもに比べ、官人としての身分を与えられる時に優遇される規則も実施されはじめた。このような「妻」を正妻と呼ぶことにしよう。

奈良時代初期の朝廷のリーダーであった藤原不比等には7人の子どものが知られているが、子どもの母親として3人の名が確実にあげられる。4人の息子、武智麻呂・房前・宇合・麻呂のいずれも、同じように朝廷の役人になり順調に出世していき、3人の娘のうち宮子は文武天皇の夫人に、安宿媛は聖武天皇の夫人となった。安宿媛は長屋王家族が殺された直後、皇后となった。光明皇后である。もうひとり、長屋王の夫人(正妻ではない)となっている。母親の待遇の差が子どもたちを差別することはなかったことがわかる。

5—大伴坂上郎女の夫たち

旅人の正妻が亡くなったあと、旅人の身の回りや家持の子育てのために九州へ旅立ったのは、旅人の異母妹、大伴坂上郎女である。

坂上郎女の前半生は、なかなかドラマチックである。最初の結婚相手は、天武天皇の皇子穂積親王である。名門大伴氏の主流で、大納言の娘にとって、少し年は離れ



■写真3—奈良時代の美人像 鳥毛立女屏風第4扇 便利堂絵葉書

ているものの、まずは良縁といってよい相手であった。しかし、結婚後まもなく穂積親王が亡くなる。

坂上郎女は実家の近く坂上の地にあった屋敷に移り住む。若く美しい女のひとり住まいに、やがて男が通いはじめる。男の名は藤原麻呂、藤原不比等の末息子である。麻呂は左右京大夫(現在の都知事にちかい)の忙しい仕事の合間をぬって、夜になると坂上の屋敷を訪れた。しかし、麻呂との関係は麻呂の足が遠のくとともに、自然に解消される。

その後、坂上郎女の屋敷には異母兄の宿奈麻呂が訪れるようになる。宿奈麻呂の間にはふたりの娘が生まれた。娘たちは坂上の屋敷で育ち、父の宿奈麻呂と同居することはなかった。父の田村の家には母の違う姉妹が暮らしている。異母姉妹が会う機会は少なかったが、互いに和歌のやりとりをするなど、暖かな交流は続いた。

6——一族のまとめ役、刀自として

坂上郎女の結婚は、穂積親王の正妻として同居婚を、麻呂とは恋愛だけで終り、宿奈麻呂とは正妻ではない夫人という立場であったから、同居することはなく、娘たちは母親の下で育つ。

このころから坂上郎女は大伴氏一族をまとめていく刀



■写真4—開化天皇陵(大伴坂上郎女邸はこの付近とされる)



■写真5—長屋王の邸宅復元模型 『平城宮跡資料館図録』より 2001年

自の役割を自覚しはじめる。正妻を亡くした旅人の面倒をみるために、九州の地まで出向き、帰京後は、旅人と母との相次ぐ死を看取った。その後、一族の本邸にあたる佐保の屋敷の管理を引き受け、秋になると飛鳥の荘園に出向いて収穫作業の指揮をとる。一族の若者には和歌の手ほどきをしたり、適当な結婚相手を紹介したりもした。中でも大切な刀自の役割は、一族の神を祀り、一族の者たちの安寧を祈ることであった。

7——長屋王の屋敷

坂上郎女の屋敷は、現在の近鉄奈良駅とJR奈良駅の間、開化天皇陵のあたりだったと考えられている。奈良時代には、東へ張り出した閑静な場所であった。一方、彼女のもとへ通ってきた藤原麻呂の屋敷も大伴宿奈麻呂の屋敷も都の中心部、平城宮の東南に隣接する地域で、上流貴族の邸宅が連なっていた。

麻呂の屋敷と二条大路を隔てたところに、長屋王とその正妻吉備内親王の屋敷があった。この屋敷は14,000m²以上ある広大な敷地を南北に二分して使い分けていた。北半分には、王と内親王のための事務所(家政機関という)や使用人の住居、倉庫や工房、厩などが並んでいたらしい。

長屋王邸に働く人々は数百人にもなり、衣類や金属製品、文具類など日常生活に必要な品々は、ほとんど屋敷

の中の工房で作ることができた。飛鳥の荘園からは毎日のように必要量の米や野菜が届けられ、全国各地の名産品の付け届けも絶えることがなかった。

南側が王と内親王の私的空間であった。ここは三分割され、東側は来客の応接や儀式に使われたことは間違いない。中央と西側の使い方については、長屋王が中央寝殿に、吉備内親王は子どもたちや王の他の夫人たちと共に西側空間に暮らしていたといわれる。つまり、妻妾同居であったというのが通説になっている。

しかし、平安時代でも貴族の屋敷で妻妾同居がおこなわれてはいない(召使の愛人は別である)。寝殿造りの北の対に北の方(正妻)が住んでいたというのも思いこみで、北の方は夫と共に寝殿に暮らす例が多い。

内親王という特別な身分の女性が、他の夫人たちと同居してははずはない。中央部は主人夫婦の寝殿、西側は子どもたちや親族の居住部分だったのであろう。長屋王の夫人のひとりに藤原不比等の娘がいる。彼女と子どもたちの住まいは別の場所にあったことは明らかにされている。他の夫人たちもそれぞれ別の屋敷に住んでいた、と考える方が自然であろう。

<写真提供>
写真1、2 奈良文化財研究所蔵
写真3 宮内庁正倉院蔵
写真4 著者
写真5 奈良文化財研究所蔵